

優秀賞

踏まれてくじけてまた咲いて

熊本市立出水中学校 3年 原田 美伶

十二月二十六日。私は薄っぺらな英語の教科書とともに日本を出発した。それは、まぎれもなく自分への挑戦だった。

その日、ポストの中に一束のパンフレットが届いていた。海外留学の案内だった。これを見た瞬間、私はなぜか行かなければという衝動に駆られた。英語は学校で習った知識以外全くなかった。学校で習ったとは言っても文法を学ぶ英語で、外国人と話したことなどほとんどなかった。なぜ留学しようと思ったのか、自分が一番不思議なくらいだ。それでもなぜ私の心は固まっていた。また、もつと不思議なことに両親からの許可もおり、イギリス行きが決まったのだった。

留学が決まってから、できるかぎりの準備はした。だが、もちろん英語ペラペラというわけにはいかなかった。それでもあつという間には過ぎ、出発日へと日付が変わった。

希望と期待と大きな不安と。リュックの中には私の唯一のたよりである薄っぺらな学校の英語の教科書を入れ、私はイギリスに到着した。そこは別世界だった。深呼吸をして吸い込まれた空気は全く知らない味で、私は心折れた。帰りたいという思いが心の中を支配する。ホストファミリーと対面したのはそんなときだった。

「Hello. Nice to meet you. You are great!」

私でもわかるような英語で、彼女はそう言った。それはまるで私はあなたの全てを受け入れます、と言っているかのように優しくと温もりをもっていた。私はその優しさに包まれて強く決心した。

「やらなきゃ、やり遂げなきゃ。」

一月三日。私は薄っぺらな教科書と大きな自信をリュックサックにつめて日本で帰ってきた。母は嬉しそうに言った。

「いい顔してる。」

私はそのとき新しい景色を見ていた。